



がんざんだいしりょうげんぞう 元三大師良源像

鬼のような木彫の写真を掲げておきます。これは、多賀町敏満寺大日堂に伝えられる像高12cmほどの木彫で、江戸時代に造られた元三大師良源の肖像です。一説によると、良源はたいそうハンサムな僧であり、宮中へ参内した際には女官達がたいそう騒いだとも伝えられていますから、およそハンサムという形容に似つかわしくないこの鬼形像を以って、良源の肖像とは不思議なことです。しかし、一般に角大師と呼ばれるこの種の鬼形像は、人々の意識において良源像です。

高像の肖像としては、滅後すぐに造られた唐招提寺の鑑真和上像、園城寺唐院の2体の智証大師円珍像、また鎌倉新仏教の祖師像なかでも臨済宗を中心に造られた頂相など、多くの例が知られています。肖像を考える場合、区別しておかねばならないのは、生前もしくは滅後すぐに造られた、本人に近い姿で写された像と、後世にその高僧に対する信仰のなかで生み出された像のふたつがあるということです。前者の例としては、禅宗の頂相を代表例として、鑑真和上像や智証大師像があり、後者の例として、それらを模した像も含めて、弘法大師像、空也上人像、また聖徳太子像などがあります。模像が作られるようになると、各大師像などには、表現されねばならない形式、言い方を変えると、各肖像として認知されるための絶対条件が必要になってくるのです。言わば、図像上での約束が確立されることとなります。前掲した鬼形像は、元三大師像としての条件を備えた像ということになるのです。

しかし、元三大師も、古くは通常の僧の姿

で表され、はるか後世に至って前掲したような鬼の姿で表されるものも出現するのです。では、元三大師とはどのような高僧であったのか、まずその略歴について触れておきます。

元三大師、正しくは良源という僧名です。良源の場合、没後に慈慧の諡号が与えられ、一般に慈慧大師または慈恵大師と呼ばれ、やや下って元三大師とも称されます。元三大師は良源が永観3年(985)1月3日、即ち正月3日に没したところからくる呼称で、その発生からすれば、他の高僧の大師号とは全く異なる性質のものなのです。

良源(912~985)は、延喜12年9月3日に近江国浅井郡で生まれたとされており、東浅井郡虎姫町三川に建つ玉泉寺が、良源生誕の



1. 木造角大師坐像 多賀町 敏満寺大日堂

地と伝えられています。延長1年(923)比叡山に入って修業し、円仁の系譜に連なる理仙を師とし、延長6年(928)天台座主尊意を戒師として受戒し、正式の僧となります。承平7年(937)学僧としての登龍門である興福寺維摩会に参加、その対論で優れた弁説が注目されて藤原忠平に認められ、忠平没後はその二男師輔が師事し、最大の後援者となります。

後世、良源に関わる悪評が色々と現れ、天狗の頭というような伝説もありますが、その遠因のひとつは、中央政界の最大の實力者、藤原摂関家との結びつきを背景とした辣腕ぶりにあるのかもしれませんが、台密はもとより、東密の石山寺淳祐からも教えを受けたとも伝えられる密教の修法を駆使して、村上天皇に嫁した師輔の娘安子の皇子誕生や、後に冷泉天皇となる師輔の外孫憲平親王の皇太子擁立に尽力してその護持僧となる活動、また師輔の第十子尋禪は、良源の本拠地比叡山横川に入り、後に良源の後継者として天台座主に就任します。良源は、尋禪を抜擢するに際して一身阿闍梨という制度を考え出します。阿闍梨とは、密教の付法を受けた僧のことです。当時の国家仏教の制度下においては、各寺院に定員が定められていたのですが、一身阿闍梨とは良家の子弟に限って定員外の阿闍梨を認めるという制度で、この後、天台宗などの要職に皇室や摂関家の子弟が任せられるようになりますが、そのシステムは、結果的にこの良源の働きかけに遠因を持つことになるのです。尋禪には、その父師輔の遺産として莫大な所領が与えられ、また横川に多くの荘園が寄進されることとなります。このようにして、荒廃していた横川の経済的安定が計られることになるのです。

康保3年(966)8月、良源は天台座主に就任、その3ヵ月後に比叡山の中心東塔の多くが火災によって消失しますが、良源は辣腕を発揮してこれを復興し、同時に自らの根拠地である横川の整備を進めます。横川に毎年3

名の僧を置き、法華堂と常行堂を整備して楞嚴三昧院とし、天禄3年(972)1月に至って、横川は東塔、西塔同様に独立する旨を申請します。天台座主良源は、当然のことながらこれを許可、ここに比叡山の三塔が成立することになります。

良源に関わる後世の悪評のうち、僧兵の発生がこの良源によるのだというものがあります。しかし、良源は天禄1年(970)7月、山上の綱紀肅生を目指して二十六ヵ条制式を定め、そのなかで武装の禁止を命じていますから、僧兵が良源の意図によって創設されたとは言えないようです。しかし、この頃から比叡山は多くの荘園を所有する権門領主となり、その経済基盤のうえに教団の安定を図るようになりますから、様々な局面において武装化が進むこととなります。また、僧兵と関連して、この頃に激化してくるのが、慈覚派と智証派、後の用語によれば山門と寺門の対立です。

この後、古代末期から中世にかけて激しく対峙する両派の抗争の遠因は、古く最澄の後継者争いに端を発しています。その両派から各々に入唐した高僧、慈覚大師円仁と智証大師円珍が出て、その法脈が比叡山の主流を形



2. 重文 木造慈恵大師坐像(本覚院旧蔵) 延暦寺

成することになります。良源は、その法脈からして慈覚派ですが、天元4年(981)11月、藤原忠平が建立した法性寺座主に智証派の園城寺長吏余慶が任命されます。慈覚派はそれを不服として、強訴をはじめとする激しい示威行動にて、余慶をはじめとする智証派は比叡山の西北麓岩倉の地に降ります。以後、智証派は比叡山に戻ることなく、園城寺—三井寺—を中心に独自の活動を行ない、激しく対立することになります。この両派の完全な訣別について、良源がそれを望んだか否かは別として、その天台座主の時代に起ったのは事実です。

このような、言わば政治的な動向から教学面に目を移すと、時期は前後しますが、応和3年(963)8月の応和の宗論に触れねばなりません。これは清涼殿で開催された法華十講に関わる宗論で、南都と天台宗の間で論議されます。南都とくに法相宗と天台宗は、最澄の時代から激しい論争をくり返していましたが、その争点は、天台宗の根本経典である法華経の位置づけと、人間が仏になれる素質すなわち仏性に対する見解の2点に要約できます。応和の宗論では、良源と興福寺の法蔵・仲算が激しく論議を戦わせ、良源の英名は高まります。論議を重視する良源は、康保5年

(968)6月の最澄の忌日に、^{こうがくりゅうぎ}広学 堅義を始めますが、これは宗内での学問の高揚を計る論議の場となります。良源の著作とされるものも多く残されていますが、天台浄土教に関わる『^{くぼんおうじょうぎ}九品往生義』などがその真選とされています。円仁によって創始された天台浄土教は、この良源を経て、その弟子源信の大著『往生要集』によって新たな展開を遂げることになります。良源の弟子には、後に天台座主となる前記した尋禅や^{せんが}暹賀・院源、また有名な学僧として源信や覚超、また良源に反抗して^と多武峯に入った増賀などがいます。

良源はこのように優れた弟子を育て、また後世の悪評も伝えられるものの、比叡山の復興を成しとげて当時の宗教界でその地位を飛躍的に高めたということができるといえるでしょう。最澄の理想を以って出発し、円仁・円珍・^{あん}安然の^{ねん}教学的充実を経て、良源によって教団としての磐石の基盤が据えられたのであり、良源を比叡山中興の祖と呼ぶことは、故なしとしないのです。

永観3年(985)1月3日、良源は入滅します。その入滅に際して、良源は比叡山を守護するために、滅後も魂は山内に留まることを誓ったと伝えられますが、その伝承や生前の功績から多くの肖像が造られ、また護符—お札—としても角大師という悪魔を退散させる恐ろしい姿へと変容してゆくのです。また、悪魔を滅するの意「^{まめだいし}魔滅大師」が変じて「豆大師」という小さな良源の像33体を表した護符も伝えられています。これは、良源を観音菩薩の化身とする伝承から三十三観音の信仰と習合したもので、良源という高僧は後世の人々の願いに応じて、様々なイメージで表されることになります。

良源の肖像は、没後すぐに画像が制作されて安置されたようですが、長寛1年(1163)石山寺で写された仁和寺蔵「高僧図巻」という^{はくびょう}白描 図像に、^{たんだ}端坐して右手に^{じゆず}数珠、左手に^{さんこしよ}三鈷杵を握る姿で表わすことが決められてい



3. 重文 木造慈恵大師坐像(青龍寺旧蔵) 延暦寺

ます。彫像としては、建保6年(1218)の銘文をもつ神戸現光寺像が年代の確実な現存最古の作例とされていますが、京都南郊石清水八幡宮の近在に建つ八角院の元三大師坐像も、優れた表現になる鎌倉時代も早い頃の作例です。通常、等身坐像として像高80cm前後に造られますが、像高2mに近い像が東京調布市深大寺大師堂本尊として伝えられています。深大寺像も、制作は鎌倉時代末から南北朝時代頃と推測されています。

比叡山の記録によると、その三塔に元久年間(1204~6)良源の肖像が安置されたとありますが、現存する山内や山麓の古像としては、文永2年(1265)延暦寺(旧本覚院)像、文永4年(1267)求法寺像、弘安9年(1286)延暦寺(旧青龍寺)像があり、京都曼殊院には文永5年(1268)の像が伝えられています。このうち、旧本覚院像の像内には長文の墨書が認められ、栄盛という32歳の僧が自ら造像の理由などを記しています。栄盛は、弘長1年(1261)より、良源像33体の造像を発願し、旧本覚院像が5体目であるといいますが、同じく栄盛が発願した京都曼殊院像には、ほぼ同文の墨書のなかで、9体目の造像としています。栄盛発願像には、他に文永11年(1274)愛知県岡崎真福寺像が知られており、そこには栄盛の名とともに仏師法橋春快の名が報告されています。この33体という数字には、前記した観音信仰や法華経信仰との関連などが伺えますが、その倍数である66体発願像が、湖東三山のひとつ秦荘町金剛輪寺に2体つたえられています。そのうち1体は、弘安9年(1286)もう1体は正応1年(1288)に完成した像で、いずれも、蓮妙が願主となり自作しています。元三大師像は、天台寺院の大半に残されていると言ってもよいほどですが、室町時代の興味深い像として、延暦寺に伝えられていると報告されている像を紹介しておきましょう。その像底には、文明9年(1477)8月の墨書があり、野洲郡六条村法定寺に安

置した旨が記されていますが、そこには文明7年山門守護の合戦によって焼亡した当堂の薬師三尊像等を復興するために、別当永勢が発願し、自ら制作したとあります。この山門守護の合戦とは、江南の守護六角高頼の圧迫を受けた延暦寺と、六角氏に対抗する江北の京極氏が連合して、共通の敵六角氏を攻めた文明7年9月から10月にかけての戦いを指していると推測されます。当初は優勢であった山門・京極連合軍は、やがて美濃の土岐氏と尾張の斯波氏の援軍を受けた六角軍の攻勢にあい、10月下旬には潰走し、江南における六角氏の支配が確立します。法定寺は、この合戦によって焼亡したと考えられますが、近年の調査によって、中主町六条の法藏寺に伝わる薬師如来坐像の銘文に、文明9年の年記と「野洲郡兵主郷内六条村法定寺之本尊也」とある記述から、両像が関連する造像であることが判明しました。良源像は、その護法的性格からして、まさしく山門守護、天台寺院の復興を目的とするにふさわしい肖像であったのです。良源の願いは、揺れ動く歴史の流れのなかで、常に意識されながら再生され続けていったのです。(高梨 純次氏 提供)

(主要参考文献)
小林 剛『肖像彫刻』日本歴史叢書23 1969年
宇野 茂樹『近江路の彫像』1974年
平林 盛得『良源』人物叢書173 1976年
叡山学院・編『元三慈恵大師の研究』1984年
なお、写真は寿福 滋 氏撮影のものを、滋賀県立琵琶湖文化館等より提供を受けた。